

2月に入り、今年度も残すところテストやレポートだけとなっている人たちも多いのではないのでしょうか？卒業生・修了生の皆さんも、論文や発表会のために詰めの段階に入っていたり、またはもう全て終わって新年度に向けて色々準備していたり、することでしょう。

一方で、新型コロナウイルスは、全国的に感染が再拡大しており、再び私たちの生活に注意が呼びかけられ、行動の制限も言われるようになってきました。

大学生活、またコロナ禍の生活の中では、苦しいこと、しんどいこともあるかもしれません。今回は、その苦しい心の声を言葉にして外に吐き出すことの大切さを有名な童話から考えていきたいと思います。

～王さまの耳はロバの耳～

あるところに、ひとりの王さまがいました。王さまはいつも深い帽子をすっぽりとかぶり、人前で取ることはなかったそう。

王さまはひと月に一度、お城に理髪師を呼び、散髪をしてもらいます。けれども、王さまの散髪をしに行った理髪師は一人として家に戻ってくる者はいませんでした。

ある日、街で一番若い理髪師がお城に呼ばれます。理髪師がお城に行くと、王さまが髪を切ってもらうために帽子をかぶったまま鏡の前に座っていました。「黙って、わしの髪を切りなさい」と王さまは理髪師に言うので、理髪師は王さまの帽子を静かに取りました。

すると、王さまの耳はロバの耳だったのです。理髪師はとてもびっくりしましたが、声を出すことはできません。知らないふりをしながら、王さまの髪を切りました。王さまは散髪が終わると、「ごくろうさま。ところで、何か、変わったものを見なかったかね？」と聞きます。理髪師は、何も見ていない、特に変わったものはないと答えます。すると王さまは「お前はかしこい奴だ。でも、わしの耳のことを誰かに喋ったら、命はないと思え」と言われ、お城から返してもらいました。

街の人たちはお城から戻ってきた理髪師に興味津々で、王さまのことを聞いてきます。しかし王さまの耳のことは王さまから口止めをされているので、理髪師は誰にもしゃべることはなく自分の胸の内に留めていました。

しかし、周りに嘘をついて秘密をずっと抱え続けるのは苦しいもの。話したいけど話せない日々を送るうちに、理髪師はお腹が風船のようにふくらむ病気になってしまうのです。

理髪師が医者を訪れると、「言いたいことを言わないで我慢していると、こういう病気になる」「もし、誰にも言えないことで苦しんでいるなら、井戸に向かって言いなさい」と言われます。そこで理髪師は、すぐに井戸に向かい、井戸の底に向かって思い切り「王さまの耳はロバの耳！」と叫びました。すると気持ちがスッキリして、お腹もだんだんへこんで元に戻りました。

しかしその井戸、なんと街中の井戸と繋がっていたのです。理髪師の声は井戸を通じてあちこちに届き、「王さまの耳はロバの耳」という噂が瞬く間に広まってしまいました。

もう秘密を隠しとおすことができなくなった王さま。帽子を脱ぎ、自分の耳がロバの耳であることを街の人たちに明かします。王さまは、「街の人たちの声がよく聞こえるように、このような耳をしているのだ」と言ったので、街の人たちは、王さまの耳について特にバカにすることもなく、むしろ肯定的に受け止めました。王さまもみんなの願い事や悩みを聞くようになりました。そしてこれまでお城の牢屋に入れられていたたくさんの理髪師たちも釈放されました。

皆さんは、この理髪師のように誰にも言えずに苦しんでいることはないでしょうか？ 童話のように、誰もいないところで叫んでみるのもいいかもしれません。ノートなどに書くだけでもスッキリするかもしれません。ただ一番よいのは、信頼できる誰かに聞いてもらうことです。

“こんなことは人に言っても絶対にわかってもらえない”と思うようなことも、話してみると意外に受け入れられたり、肯定されることもあるものです。

総合相談室は、守秘義務を大切に、聴いたお話の内容は外には漏らしません。童話の井戸のようなことにもなりませんので（笑）、安心してお話に来てください。

専任カウンセラー 後藤龍太